

〔本調子〕 名にし吾妻の隅田川

その武蔵野と下総の、詠へだてぬ春の色、桜にうかう不二の雪

柳に沈む筑波山、紫匂ふ八重霞、錦をここに都鳥、古跡のわたりなるらん

春もくる空も霞の瀧の糸、乱れて名をや流すらん

笹の小笹の風いとひ、花と愛でたる幼童子が、人商売にさそはれて、行方いづくと白木綿の、
神に祈の道たづね

浮きて漂ふ岸根の舟の、焦れ焦れていざ言問ん、わが思ひ子のありやなしやと狂乱の、
正体なきこそあやなけれ

船人は是を見るよりも、ヨイ慰みと戯れの、気ちがひよ気ちがひよと手を打ちたたき、

はやすにぞ

狂女は聞いて振りかへり、アア気違とは曲もなや、物に狂ふはわればかりかは

鐘に桜のもの狂ひ、嵐に波のもの狂ひ、菜種に蝶のもの狂ひ、三つの模様を縫にして、いとし

我が子に着せばやな、子を

綾瀬川名にも似ず、心関屋の里はなれ、縁の橋場の土手づたひ、往きつ戻りつここかしこ、

尋ぬる我が子は何処ぞや、教へてたべと夕潮に

船長猶も拍子にかかり、それその持たるすくひ網に、面白う花をすくひなば

恋しと思ふ其の人の在処を教へまゐらせん

何おもしろう花をすくへとか、いでいで花をすくはん

あら心無の川風やな、人の思ひも白波に、散り浮く花をすくひ集めん、心して吹け川風

沖の鷗のちりやちりちり、むらむらはつとはつと乱る黒髪も、取上げて結う人もなし

船長今は気の毒さ、何がなしほにと立上り

〔二上り〕 そもさてもわごりよは誰人の子なれば、何程の子なれば、尋ねさまよふ其の姿、見る

目も憂しと諫むれば

音頭音頭と戯れの、鼓の調べひきしめて、鞆鼓打て見せうよ

面白の春の景色や、筆にもいかで尽さん、霞のまにはかば桜、雲と見えしは三芳野の、吉野の

川の瀧津瀬や

風に乱る糸さくら、いとし可愛の児桜、慕ひ重ねし八重桜、一重桜の花の宴いとしらし

千里も薫る梅若や、恵を仰ぐ神風は、今日ぞ日よしの祭御神楽、君が代を久しかれとぞ祝ふ

氏人